

吉原がよひをふつ、と思ひきりぐすといふ心なるべしといへば、陶々齋が云ふ、吉原通ひを
おもひきりは、きこえたが、下のすの字は聞えず、歌に、きりぐす夜寒に秋のなるまゝ、によわる
か聲の遠ざかり行く、と云ふ其ごとく、夏の涼しき時は、此舟もはんじやうすれども、秋風もはだ
寒くなれば、浪もあらく風まけもする故、舟のかよひも遠ざかり行くと云ふ心成るべしといへ
ば、鎔屋の仁右衛門が云く、左様の事にてはなし、きりぐすとなり候聲を以て蛩きりぐすと申候と云ふ、
〔柳亭記下〕きりぐすといふ小舟

前段引し鱗形に、今獨はいまだ美若にして、ぬれ色かわかぬ柳裏鶯袖口とく今ぬぎて、頃日世に
俳諧といふ物はやりて、是をせねば人の交りもならぬやうになりゆく、もと和歌の一體と聞け
ば、やさしき道にこそ、我舉屋の朝げ、土手の夕を忍ぶ心づかいに、袖より外の草葉の露、あはれふ
かく、いぎりすとかやいふ小舟に、簾たれこめ、はれやかならぬ心地すめれど、三ツ股をめぐる汐
先より、なほ涼風は通ひ來にけり、

紫の一本天和に、船はの段、きりぐす、是は二ちやう立の舟に、ちひさきおほひゑたる舟をいふ、吉
原通ひの舟なりとあるに合せ見れば、鱗形のいぎりすは、名を聞あやまりしか、或は書あやまり
しなるべし、きりぐすをかふ籠の如く、せばきより名づけし事は論なし、此草紙のほか、此舟
の名を載たるものを未見、

〔和漢船用集六海江湖獵船〕カノコ。字未考、因州湖山の池にあり、池といへども湖なるゆへに湖
山と呼、小船三四人乗べし、毎に漁獵し、又菱を取に用、廻船の傳聞込をカノコひきといへり、カノ
コと云は、古語小舟のことを云者なるべし、今も四國の方にては、小漁船を呼て、カノコ舟と云、
〔倭訓栞中編十四〕ちよきぶね。俚語に、ちよきといふは、小早き意なれば、舟の早きをもて此名を
得たり、又猪牙船と書り、形の似たる故に、世事談には、長吉なる者造りそめたるよりの名といへ